

軍人亀鑑・谷村計介 ～その生涯と死後の評価～

宮崎市教育委員会文化財課 井田 篤

1 ふるさと、宮崎市倉岡郷糸原(いとばる)村

近世の糸原村は、鹿児島藩(島津氏)直轄領で倉岡郷に属し、倉岡地頭の所在地(元禄11年資料では1,210石)。地内には郷土集落として麓集落が形成され、また、柳瀬町と称される野町(在郷町)も形成され村とは区別されて町としての独自の行政を行っていた。同町は本庄川と大淀川の合流点にあたるため川口番所が置かれ、藩から派遣された役人が舟の出入りを改めていた。

2 生涯

(1) 誕生から青年期

① 誕生

嘉永6年(1853)2月、諸県郡倉岡郷士の坂元利右衛門の二男として生まれ、幼名を諸次郎。母は横山郷兵衛の娘でウメ、兄は祐光、姉はワサ。計介が生まれて3ヶ月余りで、母ウメは病床に臥したまま遂にはかえらぬ人となり、姉ワサが彼の面倒をみる。安政3年(1856)、計介は35年程断絶していた一族筋の谷村家の家名を継ぐ。

② 鍛錬の日々

青年期の計介の修練の場は、彼の家から南に約1kmのところにある倉岡城跡と、その下を流れる大淀川の難所であった岩磨(いわすり)湊など(逸話が多く残っている)。

明治3年(1870)には計介と姉婿の加藤利易(としやす)は鹿児島に遊学し、計介は今藤塾などで1年余り学び翌4年(1871)4月に帰省している。

③ 結婚

計介が鹿児島の遊学からもどってくると、父の計らいですでに嫁が貰いうけてあった。嫁は丸菅源五右衛門の長女でトヨ、当時17歳。知人の話では、「(前略)突然計介さんが宅へ来られて、「今鹿児島から帰ったばかりだが、自宅へ帰ってみたらトヨがおって、お辞儀をただけでなんとも言わんから、きまりが悪くて仕方がなく、ここに逃げてきた」と言われたことを覚えています」という様子の二人の出会いであった。翌年2月に女子が誕生するが、生後42日目に夭折している。

(2) 軍人となる

① 入隊から佐賀の乱

明治5年(1872)2月に政府軍に入隊。入隊の理由については明らかではないが、立身出世と経済的な理由が考えられる。入隊当初は鹿児島分営で勤務、7月には熊本鎮台本営に移動。その後、佐賀の乱、台湾出兵、神風連の乱と従軍。佐賀の乱(明治7年2月)では、政府軍が佐賀城を脱出する際、単身先行し渡船を調達して部隊を窮地から救うという功をあげている。

② 除隊の願い

計介の家族は、明治7年7月に「息子計介が鎮台兵に志願して出て行ったものの残された家族の生産努力もむなしく貧しくなるばかり。計介が帰るまでは縁組み先の谷村家の面倒を見るつもりでいたが、大淀川の氾濫で家が傾くなどして養父まで加勢できなくなった。こんな事情なので

ぜひ計介を除隊させてほしい」という除隊願を提出したが、政府軍には許可されなかった。そして、翌月 24 日付けで計介から姉・さわに、「今度父上のお計らいで帰郷出来ることになるはずだったが、急に出征することになったため帰郷出来なくなったことを詫びるとともに、出征したら恥ずかしくない働きをする覚悟であること、幼少時から姉上の傳育の恩を謝するとともに、もし自分が戦死したら不幸この上ないが、どうか父上への孝養をお願いしたい。遠い蕃地への出張なので便りも届かぬかもしれないが、自分の無事を神に祈ってほしい」という手紙が届いている。

(3) 西南戦争[明治 10(1877)年 2 月 15 日、西郷軍、鹿児島出陣]

①密使・谷村計介

2 月 26 日、計介は、第二陣密使として熊本城攻防戦の状況を政府軍に伝えるため「それでは皆さん」の言葉を残し闇にまぎれて熊本城を出る。そして、西郷軍に 2 度捕まるという危機を脱し、3 月 2 日午後高瀬の政府軍本営にたどり着く。

[伝えた内容]

- i 城中の糧食はまだ数十日分ある。
- ii 鉄砲の弾薬も余裕があり欠乏していない。
- iii 谷少将は無事。樺山・与倉の両中佐は負傷したが軽傷。
- iv 城中の士卒は少しも屈する色なく勇氣凛々としています。
- v 征討旅団が城に近づけば、城中より直ちに出撃する準備はできている。

②戦死

3 月 4 日、計介は田原坂の戦いに従軍。“三の坂”の途中で敵弾をあびて戦死。

[鮫島大将談]

「(前略)計介は伝令として戦線近く出ていったが、味方の敗軍をみて歯がゆく思い、奮然として只一人坂の右手の敵壘中に突貫し、身に数弾を受けて壮烈なる戦死遂げたのである。彼は只一人で賊壘を占領し得ない位のこと承知していたろうが、熊本城を少しも早く救いたい一心の余り、無謀にも単身突貫したものであろう。(後略)」

③谷村家の動向

ア. 兄や従兄弟たち

兄・坂元祐光は肥後人吉神村(現在の人吉市田町)で戦死(享年 36 才)。義兄・加藤利易は宮崎市瓜生野村で負傷し、帰宅後死去(享年 32 才)。また、従弟の黒葛原兼延も戦死。いずれも、西郷軍。

イ. 妻 トヨ

計介の妻・トヨは憐れな境遇となり「あれは計介賊軍の妻よ」と責められる日々を送る。西南戦争後は、計介とトヨの間には子どもがいなかったため、父・利右衛門はトヨを気の毒に思い、明治 11 年(1878)1 月に離別して実家の丸菅家に帰す。

3 死後の評価

(1) 西南戦争後まもなく

①地元では

ア. 宮崎市倉岡(地元)の計介墓

計介の死に対する地元の反応は“当然の報い”という風潮だったため、葬儀は簡単にすませ

られたが、さすがに利右衛門は明治 11 年(1878)7 月に墓を建ててこれを祀っている(遺髪のみ)。

イ. 父の不審死

明治 13 年(1880)2 月に計介の戦死賜金を受け取るため鹿児島県庁へとむかった利右衛門は、去川の山中で銃弾を受け殺害されている。当時の調書には、「その理由は官軍にて働ける計介氏の実父なるを知りて殺したるものなるか、或いは単に山賊のしわざなるか、犯人も遂に逮捕せられずして、その事由を確かむるに由なし。」とある。

ウ. 丁丑之乱戦死塚(宮崎市倉岡)

西南戦争で政府軍と西郷軍に従軍した倉岡郷士たちの慰霊碑で、明治 11(1878)年 7 月に旧士族有志によって建立された。元は旧倉岡村柳瀬町頭の丘地にあったが、現在は宮崎市倉岡の老人ホーム(特別養護老人ホームしらふじ)敷地内に残る。呉越同舟の供養碑か...

②新政府主導による“軍人亀鑑の石碑”建立

明治 15 年(1882)7 月、熊本籠城会で、谷干城が谷村計介の記念碑(=「軍人亀鑑(きかん)」碑)建立を提言。宮内庁からの下賜金や全国 2 万人からの義金により、明治 16 年(1883)5 月、靖国神社の後苑に落成。現在は、九段会館敷地内に残っている。

篆額の「軍人亀鑑」の 4 文字は有栖川宮熾仁親王(ありすがわのみや たるひとしんのう：征討総督)の御親筆で、文章は谷干城。

[熊本籠城会の主なメンバー]

谷 干城 (たに たてき)：陸軍中將、農商務大臣

樺山 資紀(かばやま すけのり)：海軍大將、海軍大臣、警視總監

乃木 希典(のぎ まれすけ)：陸軍大將

川上 操六(かわかみ そうろく)：陸軍大將

奥 保鞏(おく やすかた)：元帥陸軍大將

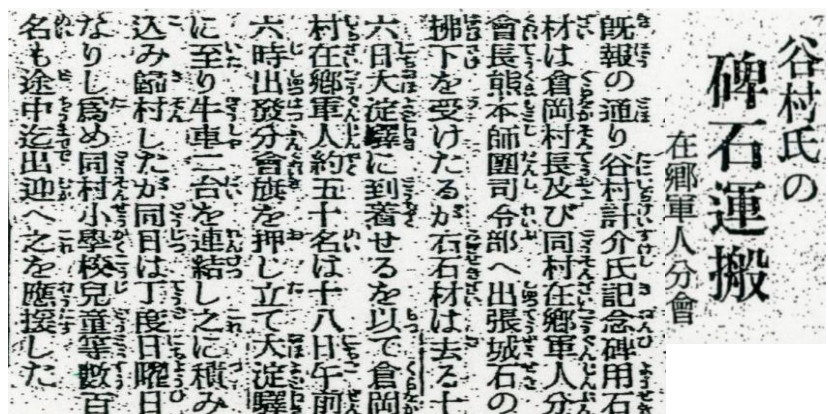
児玉 源太郎(こだま げんたろう)：陸軍大將、陸軍大臣

(2) 西南戦争後、約 50 年の時を経て

大正 13 年(1924)1 月、昭和天皇ご結婚の際、計介には「従 5 位」の位が贈られる。

①「忠烈の碑」

倉岡村では、この慶事に帝国在郷軍人会、倉岡村支部在郷軍人分會が發起のもとに功績碑の建設案が村会で満場一致で可決された。「忠烈」の二文字は閑院宮載仁親王(かんいんのみやことひとしんのう：皇族軍人、元帥陸軍大將)の御染筆による。碑石は熊本城の石垣の一つで西南戦争を証明する弾痕が付いている石を請い受け、台石は東諸県郡国富町大字森永の石峯山より産出化石を含む砂岩である。碑陰には東京帝国大学の服部宇之吉博士の撰文を刻み、大正 14 年(1925)3 月に完成。現在も、糸原公民館近くに残る。



②お守り禁止？の計介墓

西南戦争直後(明治10年)、計介の遺骸は仲間とともに宇蘇浦^{うそうら}の官軍墓地(熊本県玉東町)に埋葬された。はじめに建てられた墓石は、参拝者が記念のために打ちかいで破片を持ち帰るために摩滅してしまったため、大正4年(1915)に陸軍の指示により新規に建て替えられた。その後、「従五位」叙勲をうけて現在の墓石が建てられている。

[稲村純雄(元玉東町長)談]

「谷村計介伍長は、斥候兵として大きな手柄をたて、官軍の基地であった熊本城を無事守りぬいたと言いつづけたため、その後の日清・日露の戦争以降、出征兵士が計介の墓石の角を欠いてお守りとして持参したと言われている。そのため墓石が細くなったのでこれを立て替え、墓石の角が欠がれないように鉄板で角を囲み保護したものである。」

③郷土宮崎市と熊本城に建てられた計介像

ア. 谷村計介の胸像

大正15年(1926)10月、宮崎神宮一の鳥居西側に計介の胸像が建立。建設総裁は、上原勇作元帥(都城出身)、井戸川辰三^{たつぞう}中将で、高村光雲指揮のもと関野聖雲^{せきのせきうん}がその製作を担当。谷村定規少将長女の仲子によって除幕された。

この胸像は、太平洋戦争の金属供出の犠牲となり、昭和18年(1943)12月8日その姿を消すこととなるが、計介の死後約100年たった昭和53年(1978)3月、糸原に再び胸像が建立された[復元は宮崎大学(当時)の平原孝明氏]。

イ. 熊本城行幸橋畦の計介銅像

大正の頃、熊本市の山下宇太郎が谷村計介の銅像を建てる運動を開始。昭和2年(1927)3月に熊本城行幸橋畦、旧図書櫓^{ずしょ}のあった石垣の上に計介の銅像を建て除幕式が行われた。ただし、この銅像は、太平洋戦争の金属供出の犠牲となり、昭和18年(1943)6月、その姿を消すこととなる(副碑は今でも熊本城行幸橋畦に残る)。

④国定教科書と“計介の歌”

大正末年(1926)に改編された国定教科書修身巻三に、計介の業績が取りあげられる。また、「谷村計介」の歌が小学校唱歌となる。

4 「今」と「これから」

● 「今」

- ・地元で行われている顕彰活動
- ・宮崎市民(特に児童生徒)の西南戦争に関する認知度

● 「これから」

- ・「宮崎と西南戦争」に関する研究、周知
- ・連携事業の実施

主な参考文献 『西南戦争の功労者 谷村計介』 鈴木喬

『贈従五位谷村計介伝』 贈従五位谷村計介君銅像建設会

『金崎ふるさと考』 平山光信

『瓜生野 倉岡郷土史』

『角川 日本地名大辞典 45 宮崎県』 角川書店

『国史大辞典』